



産科婦人科

初期臨床研修

産婦人科初期研修では、原則として後期研修医（医員）と行動をともにし、また指導医がきめ細かく指導する。主に入院患者さんの診療を中心に、個々の症例を深く勉強するとともに、産婦人科診療の基本的知識や技能を習得することを目標とする。

< 1年次ローテーションの研修目標 >

1年次ローテーションでは、医師としての基本的姿勢、知識、技術を習得することが目標である。まず病棟での診療とケアの基本を習得すること、また診療チームの一員として、医療者間および患者さんとの良好なコミュニケーションがとれるようになることが大切である。また分娩の立会、産婦人科手術や処置の介助、当直業務等を通じて、産婦人科医療の意義や奥深さ、楽しさに触れていただきたい。

1. 診療チームの一員として、ベッドサイドにおける患者診療とケアを担当するための基本的な素養や能力を身につける。
2. 電子カルテシステムやオーダーリング等、京大病院における診療やケアに必要な基本的タスクに習熟する。
3. 基本的な医療面接や身体診察に習熟し、適切にカルテ記載ができる。
4. 採血、静脈注射、輸液・輸血等の基本的な医療手技に習熟する。
5. 看護師、助産師、検査技師、薬剤師等コメディカルや事務職員の役割を理解し、協力して診療できる。
6. 産婦人科診察の特殊性を理解し、患者との良好なコミュニケーションがとれる。
7. 一般検査、画像診断における異常所見等の基本的な評価ができる。
8. 患者の状態把握に努め、指導医・上級医に的確に報告できる。
9. 産婦人科手術に介助として参加する。
10. 緊急の事態に対して、チームの一員として役割を果たすことができる。

< 2年次ローテーションの研修目標 >

2年次ローテーションでは、1年次に内科的基本診療能力や基本的外科的手技が習得されていることを前提として、女性の機能的、肉体的および精神的特徴を理解し、産婦人科の一般的な疾患の実際を学ぶとともに、産婦人科診療の基本的な手技および産婦人科の専門性を見据えた診療技能の習得を目指す。そのためには最低3ヶ月間の研修を行うことを推奨する。

1. 産婦人科医療面接に習熟し、適切にカルテ記載ができる。
2. 指導医の指導・監督のもと、産婦人科診察（内診）を行い、所見を理解するとともに適切にカルテ記載ができる。
3. 胎児超音波検査などの検査や診療に自ら携わり、所見を評価できる。
4. 患者の状態把握に努め、指導医・上級医に的確に報告、相談できる。
5. 症例を簡潔にまとめ、また画像や病理所見を自ら検討し、教授回診やカンファレンスで提示し、診療方針についての議論に参加する。
6. 産婦人科救急に対して、チームの一員として診療に参加する。
7. 指導医の監督、指導のもと、妊娠および分娩の管理ができる。
8. 産婦人科手術に介助として参加し、簡単な手術は自ら執刀できる。

◇産婦人科重点・初期研修終了時点までの研修到達目標は以下の通りである。

1. 正常分娩を最初から最後まで取り扱うことができる。

産婦人科研修の大きな柱の一つは、正常妊娠・分娩の研修である。分娩の経過は一人一人異なり、また短時間に急激に変化する。見学による研修を重ねた後、指導医の監視のもと、正常分娩を自ら相応の責任を持って最初から最後まで取り扱うことで、分娩の生理に関する理解が進むとともに、生命に対する慈しみの心が養われることを期待する。

2. 腹式単純子宮全摘術を、執刀医として経験する。

腹式単純子宮全摘術は子宮筋腫や子宮頸部異形成など子宮の非悪性腫瘍疾患に対する基本的な手術術式であり、一般産婦人科診療において行われる頻度が高い手術である。一般に2時間程度の手術時間で完遂され、指導医の指導・監督のもとであれば、研修医でも最初から最後まで執刀することが可能であり、その結果に遜色がないことはこれまでの研修指導経験より実証されている。もちろん、実際に執刀する前には介助者として多数の手術を経験し、入念にシミュレーションをするなどの準備は不可欠である。

3. 産婦人科の画像診断、病理診断の基礎能力を身に付ける。

放射線診断医との画像カンファレンス、病理診断医も参加する病理カンファレンスの出席に加え、自らが担当する患者の画像・病理所見を検討し、プレゼンテーションすることで基本的な婦人科画像診断、病理診断能力を身に付けることができる。

産婦人科とともにローテーションすることが推奨される専門診療科：

- ・小児科（NICU 研修を含む）
- ・麻酔科
- ・放射線診断科
- ・病理部

（放射線診断科、病理部とは毎週合同カンファレンスを開いている。）

産婦人科専攻を希望する研修医には3ヶ月を越えて産婦人科研修することを推奨する。その場合は、研修期間や各自の研修目標到達度に応じてさらに高い研修目標を設定したい。すなわち下記の後期研修に準じて高度な専門研修を行う。また地域医療研修の1ヶ月間も、希望者には地域の産婦人科病院で研修できるようにする予定である。

後期研修

専門研修は原則として京大病院において1年間、病棟主治医として病棟診療の中核を担う。そのために病棟では病棟医長をはじめとする指導医がきめ細かく指導する。また初期研修医を指導することで、自らの知識や技能をさらに確かなものにすることを期待する。

専門研修2年目以後は主に関係病院にて研修を継続する。京大病院での研修成果を基盤としてさらに数多くの症例を経験することで、最短期間（卒後6年目）での産婦人科専門医資格の取得を目指す。

<専門研修1年目の目標>

初期研修での研修目標を確実に達成することに加えて、

1. 指導医の監督、指導のもと、病棟主治医としての責任を持って診療する。
2. 婦人科良性腫瘍手術や帝王切開術を自ら執刀し、悪性腫瘍手術の介助をする。また習熟度に応じて難易度の高い手術も経験する。
3. 指導医の綿密な指導のもと、自ら婦人科癌化学療法を施行できる。
4. 患者さんに適切に病状や治療方針等の説明ができる。
5. 外来診療の見学や介助を行い、外来での産婦人科医療の実際を経験する。
6. 初期研修医を適切に指導できる。
7. 経験した学問的に貴重な症例や統計データを学会等で発表する。